

フランス・オランダの旅行から

平山房子

我々はパリに帰って来た。パリのリヨン駅に降り立つと旅行客でにぎわうこの駅が、妙にひっそりと静かに感じたのだから今更ながらイタリーの陽気な雰囲気を感じられるというものだ。

ブルゴーニュ

ホテルに到着くひまもなく十日余りの期限を残すだけとなったユーレイルバスを活用して我々は地方への小旅行に連日忙しく飛び廻った。ラホス、グロスジャンの二組の夫婦に迎えられてのデイジョンでの短かい滞在は、ブルゴーニュ地方に広がる豊かなぶどう畑の平和な風景と共に忘れられない思い出となった。

二人そろって小学校の教師であるグロスジャン夫妻は

妻のフランソワーズがA・O・Aのレイモン・ポートルンの姪という関係で私とはポートルン家の集りの時、幾度か顔を合わせた間柄であるが、新婚ホヤホヤの二人は何時抱き合せて幸せそうであった。二十才過ぎという若いカップルなのに、寛容と知性を供えて大人のムードを感じさせる人達であった。

ミシエル・ラホスはシャトー・ジュ・ロワールの集会で知り合った三十一才の国鉄職員で、ジョゼ夫人は北ンシリイ出身の陽気で気さくな人柄で小学校の教師をしている。ワイン館めぐりや市内観光の案内をするため両夫妻は我々にずっとつきつきりであった。そのためラホス夫妻は四ヶ月になつたばかりの娘のソニアを近くに住む妹夫婦に預けに行く始末、彼らにはそういう事はお互い

様で、預けたり預かっていたりしている。子守のために母親が家に残るなどということはない。楽しみは夫婦でわかち合うものだ。ラホス夫妻はシャモニーで過ごす彼らのバカンスに我々も合流する事を熱心に奨めてくれた。こんなにもいい仲間達とこのまま別れるのは何とも名残りおしかった。この人達と一緒に過ごすモンブランの麓のバカンスは考えただけでも楽しい事だ。しかし、我々の日程がそれを許さなかった。

アムステルダム

デイジョンからローザンヌ、そしてパリへとって返し、スイスで知り合ったバス・モレルの紹介でアムステルダムの『社会科学国際研究所』を訪れたのは、八月十七日であった。世界各国の社会科学に関する資料の収集をしている研究所で、アナキズム部門担当のルドルフ・デ・ヨングが我々を迎えてくれた。物静かな学究タイプで、ホテルが見つからなかったら夜行でパリに戻るといふ我々を引き止めて、「せっかくなから来たのだから」と方々に電話をかけてペンションを見つけてくれた。国立美術館近くの素敵な家だった。清潔な部屋はセンスのよい調度品と装飾に囲まれて気品ある中年の女主人にふさわしいたがずまいを盛り上げていた。このあたりの人々は、誰で

も二、三ヶ国語を話す様だ。それも大抵は相手が呆気にとられる位流暢に喋って、それがこの人達の「少し話します」なのだから、こっちとしてはコンプレックスに落入ること甚だしい。

ヨングの連絡でバス・モレルと会った。高校教師をしていたというのだが最近その職を退いた。これからは文筆で食べていくのだという。そして彼が取り組んで来たアナキズムの文献、資料の研究に打込みたいと云っていた。ヤセ型中背の目立たない風采ではあるが瞳の色が四十男とは思われない清らかさをたたえているのが印象的であった。彼は話し好きらしい。低い静かな声で、だがかなり早口でしゃべる。いかにも真面目で大人しいといった感じである。しかし実際の彼は精力的で強固な意志力の持主らしい。彼の家はアムステルダムから百五十キロも離れた街にある。その自宅からアムステルダムの研究所にやってくるのはいつもヒッチハイクだという。我々と会っても決してカフェ・テラスに誘わない。かと言って別に観光案内する気もないらしい。足のむくまに歩きながら絶えずしゃべる。

とある横町でオランダ名物の街頭オルガンが鳴っていた。側で老人が空罐を手立っている。モレルは無造作にポケットから取り出した硬貨をその罐の中に落して通

りすぎていく。

食事をしたいと云うと、「僕はあまりそんな店は知らないで、安くて旨いところを友人に尋ねよう」という訳で友人に電話をしたりして手間どっている間に、結局我々の出発の時間が迫ってくる。強引に中央駅のレストランに入ってしまうと彼は「君達だけで食事をしてくれ、僕は家に帰れば食べられるから」とつまり金をもっていかないことをほのめかす。だが空腹なのは皆同じだ。我々の注文で彼の前にも食事が運ばれて来ると、「旅行者の君達に金を出させて」とひどく恐縮する。「旅行者だから金を持っているのだ」と一笑してやっと一回粗末な食事でありつけた。

ホークの手を動かしながら私は先刻目撃した光景を思い浮かべていた。石畳みの上で哀愁の音を響かせてかなくていたオルガン弾きのじいさんの空罐の中にモレルの手から落ちていった一枚の硬貨のことを……。豊かな心で私はオランダを離れた。

マルセーユで

夜行列車でマルセーユに向ったのは、アムステルダムからパリに帰った日の夜であった。無神論者協会のメンバーで、「神は存在するか」等の著作で知られるアルベ

ール・ポドヴァン氏から滞仏中にマルセーユに立寄る様すすめられていたのである。

あわただしく人々の行き交う早朝のサン・シャルル駅に、しかし彼らしい出迎えの姿は見えなかった。二、三日前パリから出しておいたハガキは届いている筈だと思いなながら、ともかく地図をたよりに訪ねていく事にする。ベルナージュに本拠をおく無神論者協会は主として個人加によるメンバーから組織され、反教会権力運動をすすめている。機関誌の発行も回を重ねる一方、年一回フランスに於いて定例会を開催する。

私はその実力的メンバーであるポドヴァン夫妻に会ってくわしい情報がきける事を大いに期待していた。だが郊外の新興住宅地でやっと探し当てた彼の家は戸口も周囲の窓も残らずとざされていた。鋸戸の降ろされた窓の一つ一つがこの家の住人の遠出を物語っている様であった。置手紙を残してそこを離れた。夫妻はその期間、カンヌでの彼等のバカンスを楽しんでいたのだ。一週間ばかり後、彼からの丁重な詫び状がパリの私のホテルに届けられた時そのことを知った。更にその手紙にはバカンス明けて仕事の待っている夫妻にはパリ迄の旅もかなわず、我々の再度のマルセーユ訪問を要請してあった。こちらとしてもそれを望まぬ訳でもなかったが、機会を見

出せぬまますぎてしまった。

我々は市中に引き返した。マルセーユは陽気で楽しい街だ。通りですれ違ふ若者はみな、 \wedge エドモン・ダンテス \vee の様に思えるし、下町のレストランに入ると面白い客が喰べ終った皿は下げないでそのままテーブルに重ねていくのだ。勘定というとボーイがやってきて、その皿の数をかぞえ、たちどころに計算する。新鮮な魚料理に堪能して精気を取戻し、食事前に立寄って留守だったC・N・Tのホセ・バレス・アーニョのアバルトマンを再び訪ねてみる。やっぱり部屋の戸は閉っていた。そこは旧港のそばであった。ぶらぶらと歩きながら岸壁のほとりて写真をとっていると、フランス人の若い男女に声をかけられた。

\wedge ニコン \vee の8ミリカメラが故障したらしくて動かないのでみてくれないかと云う。我々に直せる筈がないので、「専門店で見てもらう方がいいのじゃないか」というと、「今日は土曜日で店は開いていない」という。成程うっかりしていた。だが何といわれても直せないのに変りはないから、 \wedge ニコン \vee に代って謝罪して放棄してもらった。

アレクサンドル・デュマの小説『モンテクリスト伯』で有名なシャトー・ディフへの遊覧船がここから出てい

る。棧橋から片言の日本語で我々を歓迎する呼び込みのオッさんをからかいながら船に乗り込んだ。例の8ミリカメラの二人ずれも一緒だった。彼等は我々と腫が合うと肩をすくめてカメラの故障を残念がってみせるので弱った。

島に戻って、三度、ホセのアバルトマンを訪ねると今度は人の気配があった。当人ではなく、C・N・Tの仲間たちであった。そこで我々は十九日から一週間、このマルセーユでC・N・Tスペインのフランス全国大会が開催されていることを知らされた。その仲間のひとりに会場まで案内された我々は、そこでホセ・アーニョに会う事が出来た。中肉中背、みるからに温厚な老人で、初対面の我々を快く会場の中へ引き入れてくれた。

そこには百人近い人々が集っていた。正面演壇のC・N・T、A・I・Tの文字の染めぬかれた大横幕が先ず目に飛び込んで来た。演壇の下方にある黒板に大きな呼び声と共に数字が書き込まれていく。側からホセがスペインで捕えられている政治犯救済の拠金だと私に説明してくれる。出入口の近くには、飲料水や本の売店が出ている。忙しく立働いている売子もC・N・Tのじいさん連中だ。並んでいる本は殆んどがスペイン語で私にはよく分らない。しかし『スペイン革命展望』とか『集産主

義」といった題名をながめていると、ホセが素早く取り上げて持っていくという。更にこれも、あれもと次々私の手追加する。金を払おうとすると、とんでもない、プレゼントだと云ってきかない。周りの者も笑ってとりあわない。売店のじいさんは我々のためにジュースの栓をぼんぼん抜いてサービスに努めてくれる。

ホセが一人の女性を我々に紹介した。「ヘデリカ・モンセーニだ」と云う。スペイン市民戦争の元大臣で、今はツールーズで『エスポワール』紙に参画している事は私も知っていた。「ああこの人が！」という私の一瞬の目の輝きを敏感に察知して彼女は満足気な微笑を返した。老令とは云え、がっしりとした軀を濃紺のワンピースに包み、胸につけた造花の真紅の色が一きわ鮮かに映える。にこやかな応待の中にも、さすがと思わせる貫祿がのぞく。議事進行中にこの彼女の提言で我々は壇上のマイクの前に立たされてしまった。彼等の間でヘデリカの発言は、今でも八鶴の一声V的存在をもって居る様であった。何でもいらいからあいさつしてくれというのだ。偶然に來合わせたとて、メッセージの用意などもとよりなかった。こちらで打合せするいとまもあたえず壇上に追いあげられた我々は、えーいままよと度胸を据えてフランス語と日本語で一言ずつあいさつする。会場をゆるがす

大拍手を浴びていると一人の女性が下から私のカメラでパチパチシャッターをきってくれた。帰国後、それこそ大演説でもやらかしている様な立派な写真にそれは出来上って我々をニヤニヤさせたのである。

ここに集まった人々は、すべてフランス国内に居住している亡命スペイン人であった。市民戦争生き残りの老人達であった。彼等はあの華々しい栄光の歴史の中を生きたのであり、又、自らがその栄光の担い手でもあったのだ。だが目の前の集会には、それを偲ぶ生彩さは、もはやどこにも見当らない様であった。歴史的視点におけるスペイン市民戦争が常に栄光に包まれて、とどまっているというのに、そこで戦い、その栄光を支え様として生き残った人々には、歴史と共に立上る事の一刻も許されないという苛酷さを歲月は物語っている様であった。大会はおそく迄つづけられいつ終るともしれなかった。我々はそこに集り素朴で善良な人々に別れを告げ会場を後にした。深夜の港町はネオンに彩られ、陽気な表情の人々が通りにあふれていた。

パリにて

ポルドーからラ・ロシエルと北上してパリに戻った。帰国迄にあとイギリス旅行を残すだけである。しばらく

このパリに腰を落着ける。旅行者にとってパリは何と魅力にあふれた素晴らしい街であることか！パリは変わった！と人々は云う。モンバルナスのセルフサービスの店で食事を摂っている時、座り合せた老女は云った。「昔はよかったですよ。私の亡くなった主人は駅（モンバルナス）の近くのキャバレーでピアノを弾いていました。私は踊り子でした。その頃は駅も今の様に大きいものではありませんでした。駅前のあんなタワーなんて勿論なかったですしね」白地に紺の水玉模様のワンピース、その水玉の紺と全く同じ紺色で帽子とコートを揃えた小粋でお洒落なロートレック時代の美女はこう云って淋しそうに幾度も首を横に振るのだった。「時代の波ですね、マダム。それが人生なんでしょうか……。勇氣を失なわないで」と私は彼女を励まして別れた。

パリに住む老人達は皆彼女と同じ事を私に云った。たしかにこの二、三年の間にも、パリは変化を見せていた。老朽建築物は次々と壊されて街は新しい様相に変わりつつある。

市の中心街、パリ市庁から程遠くないオードリエットにあるエスベランチストのジャン・ベランのアパルトマンを訪ねるとその古い建物は外郭を残しただけで、三年前のベラン夫妻との楽しい語らいの場所もはやない。

それは旅行者の私にとって、ずい分淋しい事だった。だがパリ、パリはやっぱ私の恋人だ！通りの隅々まで刻みこまれた歴史の跡をたどれば、その時代の敬愛する人物が忽ち蘇生し、小説の主人公達が微笑みかけてくる。人はそこでは無限に広がるタイムトンネルの中をさまざまの事が出来る。現実のパリでは、道行く人々は皆、のびのびと自由で自分の人生を歩んでいる様だ。他人の目を感ぜさせない街は、旅人を解放感にときほぐす。

我々は十四区のダンフェール・ロシユローのホテルで暮した。中央広場に立つハベルフォールのリオンVで有名なライオン像（一九六八年の五月革命の時、ハ赤毛のダニイVことコーン・ペンディットがこの像の上で演説をして最近の話題をにぎわした）の頭の方角に我々のホテルがあった。北側はモンバルナス墓地の石塀が続き、それに沿って一〇分も歩けばモンバルナス駅であった。途中、時々買物に立寄るチュニジア人らしい乾物屋の夫婦とも顔なじみになり、その前を通るとベレーをかぶったおっさんが水色の作業衣の腕を上げて「オーッ」とガラス窓越しに我々に笑いかけた。ワインを買いに入ると、こちらが運んだものより、はるかに値段の安い瓶を「うまいから」と強引にすすめるけったいなおやじさんだ。朝の散歩ですれちがった、口ひげを蓄えた威厳の

ある長身の紳士が、アイスクリームを喰べに入つた近所のカフェで注文をとりに来たボーイだったりして実に楽し。

イルデホンソ・ゴンザレス

パリに着いて、すぐに連絡をとっておいだイルデホンソ・ゴンザレスから返事があって、ロワール河岸にある彼の家を訪問したのは、短いバリの夏が最後のあがきにたけり狂っている様な残暑の中でくれた八月二十二日の宵であった。

C・N・T亡命スペイン人の月刊紙『フロンテ・リベラタリオ』（当時はフランス、スペイン二国語による新聞であったが、最近は全紙がスペイン語になった）のメンバーで文筆活動をつづけている六十四才の老闘士である。というより私にとっては、とてもやさしいおじ様と云った気持で、まず彼が思い出される実に温厚、端正な紳士である。

三年前、『フロンテ・リベラタリオ』のコレスボンダンスのアマドール・アルバレスやA・O・Aのポラトン夫妻達と一緒に、サン・ラザール駅で落合つたのが彼の最初の出会いであった。山鹿泰治と長年の交信があり、彼は私と向き合ひなり山鹿さんの事ばかり話した。

中でアラセリは珍らしく、慎ましやかな女性であった。万事ひかえ目で、自分を押出さず、それで一生懸命、台所と我々の食卓の間を往き来して接待につとめてくれる。その夜、私は快くしたたかに酔った。

数日してポラン夫妻は我々をフォンテーヌブローに誘ってくれた。ミシユルは今にもバンクしそうなお腹をせり出しながら、みんなの先頭に立って森の岩場を歩くので、私はびっくりしたりあきれたり。だが当人も夫のポランもケロリとして興じていた。

そのお腹の子は男の子だった。後日、旅行の興奮からまださめやらぬ日本の私の元へ、男子誕生のニュースがとどいて、そこに記されたオリヴィエという名前を見たとき私は嬉しかった。何故ならその名付け親が祖父のイルデホンソであることを知っていたからだ。

それは九月に入つて間もない夜、イルデホンソとポランはボン・ヌフの橋のたもとのレストランに我々を招待してくれたのだ。薄暗い地下室で、ろうそくの灯りがギターを弾き語る男の手元を照らしている雰囲気私をよろこばせた。野趣にあふれる料理に舌つづみを打ちながらイルデホンソは私にささやいた。「もし、男の子ならオリヴィエだ」ポランの方は、苦笑いしながら陰で私にもらした。「本当は自分達の好きな名前をつけたいんだ

一度も会った事のない山鹿さんを心から敬愛している様子のイルデホンソ自身が、謙虚で誠実で、あたたかい人柄で、山鹿さんに似かよつたものを私に感じさせるのに時間はかからなかった。短かかったがその出会いは、私を甘美なものに包んだ。彼も同じ想いだつたのか、それから後もこのハサン・ラザールのめぐりあいVのことを幾度か手紙の中で述懐して来た。パリでの再会は、お互いに待ち望んでいたものだった。

近代的マンションの十階のイルデホンソの住居では、妻のアラセリと彼等の息子夫婦が揃って我々を待ちうけていた。ちょうど息子のポランが日本旅行から帰つて来たばかりで、日本の話題が大いに食卓をにぎわした。一人息子だというポランは二十五、六才、中肉できりつと引き締つた軀に、彫りの深い整いすぎた容貌がややもすると冷たい感じさえあたる美男子である。妻のミシユルは夫とは対称的に飾り気のない気さくな女性である。妊娠中の目立って大きなお腹を抱えながら元気でよくしゃべる。イルデホンソはそんな会話の中で、常に慈父の様な微笑みを絶やさず、話しの気をとられてはいる私に、「フサコ、フサコ」と料理をすすめる。妻のアラセリは物静かで上品な婦人である。ヨーロッパで接した多くの女性達が、行動的で力強い生活者として私の目に映つた

が……」私はほほえましい親子の情愛の表われとしてそれをきいた。そして、その男の子におじいちゃん希望通りの名がつけられたことは、やっぱり嬉しかった。

カラカスのヘルミナル・グラシャ夫妻とこのパリで思いがけない邂逅をもつ事が出来たのもイルデホンソの計らいであることを知って私は感謝した。パリでイルデホンソとすごした時間のすべては私を満足させるものだった。イルデホンソは私と会う毎に云った。「フサコ、次は何時パリに戻ってくるのか？」約束出来ないで黙って微笑み返す私の顔をのぞきこむ様に彼は問いかける。

「三年たったら？」「ウィ」と答えることは出来なけれど、パリを離れる前から、私の心は又いつかここで彼等と会うことの空想で満たされていくのだった。